目　次

巻頭言《北海道教育庁留萌教育局局長》……1
たくましく未来を切り拓く子どもを育むために
学習指導の実践的研究……2～3
第24回
「教育展望札幌セミナー」に参加して…4
研究所内ゼミナール……5
「私と教育」……6～7
表紙写真解説《留萌市立北光中学校》…8
今年度の各部の反省……8
編集後記……8

巻頭言

たくましく未来を切り拓く子どもを育むために

北海道教育庁留萌教育局
局長　井之口　淳　治

留萌管内教育研究所におかれましては，学校教育の今日的課題を踏まえた研究，研修事業を推進されるなど，管内教育の充実・発展に大きく寄与されておりますことに，心から感謝を申し上げます。

さて，今日，学校教育においては，予測困難な社会の変化に主体的に関わり，よりよい未来を創り上げていく資質・能力を子どもたちに育むことが求められています。

こうしたことから，各学校においては，子どもたちが学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し，能動的に学び続けることができるよう，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが重要です。

そのためには，単元や題材などの内容や時間のまとまりの中で，学習を見通し振り返る場面，グループなどで対話する場面，子どもたちが考える場面，教師が教える場面などをバランスよく位置付ける必要があります。

こうした中，本研究所では「学ぶ意欲『～たい』を引き出す学習指導の実践的研究」を研究主題に掲げ，

- 単元の目標の明示で見通しをもたせ，学びの意義を明確にさせる，主体的な学びを生む学習活動
- 既習の知識及び技能によって考えの根拠を明確にさせる，思考力・表現力を育成する学習活動などの授業を研究協力員が公開されました。

このように，単元で目指す子どもの姿を明確にしたり，内容の系統性を踏まえて単元の指導計画を工夫したりする実践は，まさに時宜を得たものであり，誠に心強く感じているところであります。

今後に向けては，各教科等を学ぶ本質に迫る「深い学び」の実現に向け，どの視点で物事を捉え，どの考え方で思考するのかなど，各教科等ならではの「見方・考え方」を働かせる学習活動の充実について研究を深め，管内教育をさらに牽引していただくことに大きな期待を寄せているところであります。

教育局としましては，社会で活きる実践的な力を身に付けた，たくましく未来を切り拓く子どもを育む教育の充実に向け，留萌管内教育研究所をはじめ，教育委員会，学校，関係機関と一体となって様々な取組を推進してまいりたいと考えております。

結びに，留萌管内教育研究所のますますの御発展と，関係の皆様方の御活躍を祈念申し上げ，所報の発刊に寄せる言葉といたします。

第８次共同研究〈３か年継続研究：３年次〉

◆研究主題◆

学ぶ意欲「～たい」を引き出す学習指導の実践的研究

本研究の仮説「学習活動に見通しをもたせ，メタ認知的振り返りを行う。また，伝える相手を意識させた表現する場を学習過程の中に位置付けて指導していくことで，子どもたちは，主体的に活動し，表現力を向上させることができるだろう。」のもと，３年次研究の３年次目は，下記に示した重点に沿って研究内容を深め，天塩中学校の福原研究協力員に国語科の授業を，羽幌小学校の佐藤研究協力員に算数科の授業を行っていただきました。以下の通り，今年度の研究の成果を確認することができました。

視点１：主体的な学びを生む学習活動

①学ぶ方法と解決の方法を見通す活動の設定と工夫（やってみたい）（考えたい）

子ども一人一人が興味関心を高め，「やってみたい」という気持ちを高めるために，児童生徒の驚きや疑問から課題設定を行うことが有効であることは，前年度の提案授業から見られた成果である。

引き続き，上記の内容を継続しつつ，より主体的な活動につなげるために，子どもたちに単元を通した学習活動の見通し，１単位時間の学習活動の見通し，課題を解決するための見通し等を教科の特性に合わせて適宜行っていくことで「やってみたい」「考えたい」という学習の意欲の高まりにつなげることができると考える。

◎単元を見通した提示（重点）

１年次目の国語科の検証授業において，単元最後の目標地点を提示したり，そこに至るまでの学習計画を提示したりすることで，意欲をもって主体的に学習する姿が見られたことから，教科の特性はあるが，積極的に行っていく。

②学びの過程や結果を振り返り，次の学びへとつなげる活動の設定と指導の在り方（学びたい）

１年次目の提案授業で「前時の振り返りをその後の授業に活用できる方がより効果的ではないか。」という反省が出たことから，昨年度は，前の時間に自分がどういう状態だったのかを振り返るために，授業冒頭に自分が書いたことを確認する時間を設定した。子どもたちの思考につながりをもたせられることや，教師による確認（チェック）を行うことで，記述内容の高まりが見られ，次の課題へとつなげることなどに有効であるという成果があった一方，「分かったこと」を書く場合，「まとめ」と同じことが振り返りに書かれることが多くあったという課題が出てきた。授業冒頭での確認は，教科や単元の特性もあるため，特にこだわらないこととするが，振り返りの意義をしっかりと指導者側がおさえておくことが重要である。

本研究では，振り返りを行うことにより，子ども自身が自らの理解状態を把握した上で，次の学習へと進むことができると考えた。また，子どもの理解状態を教師が把握し，適切に関わっていくことで，主体的な活動や，思考力・判断力・表現力の育成につなげることができると考える。

◎記述による振り返り（重点）

発達段階を考えると小学校３年生以上からの取組と押さえる。記述内容としては，自分の学習の取組を振り返り，自分の理解度を客観的に見た評価を記述させるようにする。

＜内容に関わること＞：学習事項の知識や技能……分かったこと，むずかしかったこと　等

＜理解の変容に関わること＞：既存の考えから新しい理解への変化

……友だちのよかったところ，気付いたこと　等

＜学び方に関わること＞：学習した筋道や自分の思考・判断

……自分が頑張ったこと，次にやってみたいこと　等

※情意面（感想）などを入れても効果的。

視点２：思考力・表現力を育成する活動の工夫

①学びをつなぎ，筋道を立てて考え，根拠や理由を示して伝える活動の工夫
（話したい）（聞きたい）

これまでの提案授業を通して，「伝える」という相手意識をもって思考し，自力解決を行っていくことは，表現力を高めていくのに効果的であることは，成果として確認している。ただ，１単元のみの学習活動で向上させられるものではなく，学年を通して，目的や相手を明確にした表現活動を繰り返し行うことが大切である。

また，文章として書くことにはこだわらず，聞く相手を納得させる表現方法の工夫（学習形態など）を促すことで，「伝える」という相手意識をもった表現力の育成につなげることができると考える。

○目的意識や相手意識を明確にした指導（重点）

筋道を立てて考え，根拠や理由を示して話すことを，学年を通して繰り返し行うことで，話すことに慣れさせ，自信や活動への意欲をもたせる。

＜活動例＞　最終的に友達の考えを発表してもらうことを伝え，ペアで考えを交流する。
（相手の考えを全体交流で発表することを前提とすることで，相手に理解してもらうという話し手の相手意識を高める。）

＜目的に応じた学習形態＞
①考えを伝え，確かめるために……ペアまたはトリオ
②考えを深めたり，広げたり，さらによりよい考えを発見していくために
……トリオまたはグループ（４～６名）

②解決のきっかけをつかみ，考えを深めるための交流の工夫（聞きたい）（やってみたい）

交流を行い，お互いにアドバイスし合うことで，表現力を高めることができることは成果として確認できているが，聞いていることが相手に伝わるような手立てを行うことで，「さらに聞きたい」という意識や「理解しながら聞く」という聞く力をさらに高めることができると考える。

また，自力解決で解決に辿りつけなかった子どもにとっては理解をする場として，解決できた子どもにとっては，自らの考えに自信をもたせたり，より深めたりする場としての交流活動にするために，聞いていることが相手に伝わるような取組を発達段階に応じて設定し行ったり，何のためにその活動を行うのかを理解させ，より「聞きたい」「やってみたい（話したい）」につなげるために交流ポイントを分かりやすく事前に提示したりするなどの取組を行っていくことが大切であると考える。

視点１：成果

- 今年度２本の検証授業ともに，単元を見通した提示を行った。国語科であれば，単元を貫く言語活動を設定し，前時までのつながりを意識させた学習展開を行った。算数科であれば，単元の最初の学習で，単元の最後に学習する活用問題を提示し，「これからすること・していくこと・できそうなこと」などをイメージさせた。これらの活動により，課題解決に向けて意欲的に学習に取り組む様子が見られた。
- 単元を通して，１単位時間ごとに振り返り活動を継続して行った。記述の際の観点を提示したことで，「したこと・できたこと・できるようになったこと」を実感させ，次時への学習意欲の高まりにつなげられた。さらに，子どものつまずきや変容を把握し支援に生かすことができた。また，単元の初めと終わりの振り返りを行うことで，自己の変容をとらえ，自信や学びの価値を実感することへつなげられた。

視点２：成果

- 単元を通して，１単位時間において交流活動の場面を設定したことで，「自分の考えを他者に説明する」ことを見通した個人思考が習慣化し，「話したい」という意欲や「話せる」という自信だけでなく，自分の考えを簡潔に表現するなど思考力や表現力を高めることにつなげられた。
- 交流のねらいやポイントを発達段階に合ったものを分かりやすく提示したり，学習形態を工夫したりすることで，「だれに・何のために・どうすべきか」を理解し，相手意識や聞く意識を高めることができた。

詳細につきましては，研究紀要第23号（平成30年３月発刊）に掲載しておりますので，ぜひご覧ください。

第24回 教育展望札幌セミナーに参加して

平成30年１月６日(土)にホテルポールスター札幌において「資質･能力を育成する教育課程の編成と実施～学校を開き，北海道教育を拓く～」と題し，第24回教育展望札幌セミナーが開催されました。
今回は，合田　哲雄　氏（内閣官房人生100年時代構想推進室内閣参事官），田村　学 氏（國學院大學教授），寺崎　千秋 氏（一般財団法人教育調査研究所研究部長）の３名が理論提案を行い，國行　宏昭 氏（三笠市立三笠小学校 教頭）と音羽　英明 氏（三笠市教育委員会学校教育課 高校生レストラン準備室 係長）が実践提案を行いました。提案を受けて行われた協議では，『深い学びを実現する授業改善と学校づくり』を柱として，コミュニティー・スクールによる開かれた学校づくり，資質・能力を育成する教育課程や授業づくりについて議論がなされました。以下，提案された内容について概略を紹介します。

理論提案Ⅰ　合田　哲雄 氏

『新学習指導要領について
－三つのポイントと改善の方向性－』

1　今回の改訂と社会の構造的変化
- ＡＩ（人工知能）の飛躍的な進化
- 日本の学校教育が育む「人間の強み」
- 人づくり革命と人生100年時代構想

2　知識の理解の質を高めるための三つのポイント
⑴　資質・能力の三つの柱
①知識及び技能　②思考力，判断力，表現力等　③学びに向かう力，人間性等
⑵「主体的・対話的で深い学び」の観点からの授業改善
各教科における「見方・考え方」の重視
⑶　カリキュラム・マネジメントの確立

3　具体的な教育内容の改善～大学入試改革から～
4　学習評価に関する検討の観点
5　条件整備と業務改善

理論提案Ⅱ　田村　学 氏

『教科横断的な学習に求められる「活用・発揮」すること
－「主体的・対話的で深い学びの実現－』

□「深い学び」を実現する授業のイノベーション
「深い学び」とは，知識・技能が関連付いて構造化されたり身体化されたりして高度化し，駆動する状態に向かうこと。（知識・技能が相互につながり，場面や状況につながる）
「主体的・対話的で深い学び」を促進する教師力
1　子どもの姿や発言を丁寧に見る，聞く（捉える）
2　子どもの思いや考えを理解する（解釈する）
3　本時のねらいとの関係を考える（照合する）
4　どのように振る舞うかを決める（判断する）
5　分かりやすく板書したり，端的に発問したりする（振る舞う）
□「深い学び」を実現するカリキュラムのデザイン
カリキュラムマネジメントの充実 → 単元配列表

３つの理論提案を通して明らかになったのは，「主体的・対話的で深い学び」に向かう考え方とその学びを支える教師力の重要性でした。新しい社会が発展すればするほど，人間はより人間としての能力や魅力を高めていくべきだという考え方は大変参考になるものでした。だからこその「深い学び」や「道徳科」なのだと思います。

理論提案Ⅲ　寺崎　千秋 氏

『資質・能力を育成する教育課程実施の授業をどのように進めるか』
1　主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善
2　主体的・対話的で深い学びをどう実現するか
3　学習評価の充実

実践提案　國行　宏昭 氏・音羽　英明 氏（三笠市）

市内小中学校８校から４校へ統合したのを機に，コミュニティー･スクール（CS）を導入。「地域科」（総合）を中心に市内の様々な活動と連携。特に「食」を一つの核とし，田植えや収穫，三笠高校とも連携。ＣＳ導入後児童生徒の自己有用感の高まり，地域に誇りをもち，夢や希望をもつ生徒の増加が見られた。

研究所内ゼミナール

研究所員がこれまでに積み上げてきた知識や技能を紹介し，それぞれの教育現場で活用していこうとするための実践交流会の報告第３弾です。山本研究員・野々村研究員・寺澤研究員の取組を紹介します。

◉山本研究員による報告

「新学習指導要領における外国語教育について～円滑な実施に向けた移行措置での指導内容等～」より

小学校の外国語教育は，平成32年度からの新学習指導要領の円滑な実施に向けて，平成30年度から２年間，移行措置が行われる。

《移行期間中の３・４年および５・６年の内容等》

	３・４年	５・６年
時数	年間15単位時間	年間50単位時間（現35＋新15）
内容	外国語活動	外国語活動＋外国語科
必ず取り扱う言語活動	聞くこと及び話すこと【やりとり】【発表】の一部	音声，活字体の大文字と小文字。文及び文構成の一部。読むこと及び書くことの一部。
教材	Let’s Tryから必要な内容	Hi, friends!(現) とWe Can!(新) から必要な内容 ※５年のみ，Let’s Tryから必要な内容も追加

移行期間中の授業時数の特例として，特に必要のある場合は，総合的な学習の時間の授業時数から15単位時間を超えない範囲内を充てることができる。

《移行期間中の学習評価》

- 移行期間に追加して指導する部分を含め，現行学習指導要領の評価基準等に基づいて行う。
- 指導要録の取り扱いについては以下の通りとなる。

【３・４年】総合所見及び指導上参考となる諸事項を記入する欄に，顕著な事項を記入
【５・６年】外国語活動の記録の欄に文章記述

◉野々村研究員による報告

「北海道教育大学附属旭川中学校研究大会」より

北海道教育大学附属旭川中学校では，昨年度までの３年間，『学習指導要領から観る各教科の本質と役割』という研究主題を掲げ，学習指導要領の趣旨に基づき，各教科の本質と役割について追究してきた。その結果，学びのプロセスを見直し，改善を図っていくことが必要であると考え，新たに研究主題を『新たな価値を生み出す学びのプロセスに関する研究』とし，１年次目の今年度は，副主題「自らの思考を自覚的にとらえる生徒の育成」のもと，各教科における「目指す生徒像」を設定し，「目指す生徒像」に迫る手立てを明らかにすることで，研究主題に迫っていた。私が参観した社会科では，「目指す生徒像」を①資料を的確に選択，考察し，それを根拠として判断することができる生徒，②自分の思考や判断を自分の言葉で主体的に表現することができる生徒，③他者との交流により，自他の思考や判断を成長させる生徒とし，その手立てとして，①思考や判断の記録化（問題や課題に対する自分の考えや疑問点，他者との意見交流結果や他者から学んだことなどをノートに記録），②資料提示の工夫（教師が生徒の思考を的確に予想し，その思考を揺るがしたり，強く根拠付けたりする資料の提示）の場面を設定することで成果をあげていた。

◉寺澤研究員による報告

「青少年教育施設における体験活動の実際」より

国立青少年交流の家では，様々な体験活動を行っている。その必要性には次の事柄が考えられる。

①子どもたちのコミュニケーション力の低下（単語で喋る子どもたち）
②ＩＣＴ，国際化の進展などの社会変革（社会の要求する技能の急速な高まりに対して，実際に備えている能力・意欲とのギャップの顕在化）
③脳科学的な観点（４～12歳では体験によって小脳が発達し，神経回路が増加する）

また，子どものころ体験活動が豊富な人間ほど「規範意識」「職業意識」「文化的な作法や教養」「意欲や関心」「人間関係能力」が高い傾向があることが証明されている。しかし，家庭や地域など子どもを取り巻く環境によって体験活動の格差が広がっているのが現状である。

多くの子どもたちに体験活動に触れさせるために，国立青少年交流の家では，体験活動事業を自ら実施するだけではなく，地域学校共同活動の推進の一環として，体験活動推進員の養成や各種普及・啓発資料の作成・配布などを行っていた。詳しい資料が必要な方は，声をかけてください。

私と教育　粗忽者の日々

増毛町立増毛中学校　養護教諭　**本　山　優　子**

12月にセレクト給食があり，パン・フライ・ケーキ他を各２～３種類の中から選ぶことになった。早々に希望調査を取り，個数確認もばっちり。給食室への依頼も終え，余裕で迎えた当日の昼。ひとクラスから「フライの数が合いません。」との連絡が。そんなはずは！と手元の一覧表をよく見ると，何と白身魚とササミの発注数を反対に記入していた…。

小学生の頃から通知表に「テストは必ず見直すように」とか「じっくり考えましょう」など“お前は慌て者で不注意な性格だから心配”をオブラートに包んだ文章が記されていたっけ。少しは成長したはずだったのだが，まさに『三つ子の魂百まで』。

ダッシュで２階へ行き，配膳途中の教室で「ごめんね。先生がフライの数，書き間違えました！ほんと，ごめん！」と謝罪。ブーイングの嵐を想定していたのに，返事は「いーよー。」「じゃあ，じゃんけん争奪戦するか。」という生徒や先生の声々。それぞれに不満があるだろうに…。本当に申し訳ない。

思えば，これまでどれほど周囲に助けられてきたことか。仕事は勿論のこと，こんなふうに精神的にも多くの場面で助けてもらった。その何％かでもお返しができていたら良いのだが，全然自信がない。本当に長い間ありがとうございました。

私と教育　「38年間の教員生活」

留萌市立東光小学校　教諭　**沢　口　眞裕美**

教師になったばかりで右も左も分からず，周りの人に迷惑をかけっぱなしの日が続いていました。授業をしていても子どもたちは集中せず，指導しても全く言うことを聞かず，部活は専門的な知識もなく，毎日毎日が正直言って苦しいものでした。

ストレスがピークに達しそうになっていた時に子どもから言われた一言が忘れられません。「みんな本当は，先生のことが大好きなんだよ。」教師になりたてで一つも満足にできない自分のことを慕ってくれている？普段は何も聞いていないようで実は自分のことを注目していた子どもたち。かげから応援してくれていた子どもたちがちゃんといたのでした。

その後も色々な子どもたちとの出会いがありました。座っていられない子，話しだしたら止まらない子，一切しゃべらない子など。その都度，悩みながら指導しましたが，今思えば担任以上に苦しんでいたのは子ども本人だったと思います。

現在は特別支援学級を受けもっていますが，当時のことを思い出しながら「あの子は生まれつき困難を抱えていたのかもしれない。」と考えると申し訳ない限りです。若かったころのことを思い出して顔が赤らむことも多いのですが，周りの方々に支えられながらも，何とか最後まで勤められて今は満足しています。

私と教育 「教師冥利に尽きる」

羽幌町立羽幌小学校　教諭　**藤　澤　晋　一**

「教師冥利に尽きること。何を思い出す？」

先日，こう質問されて，私はすぐに答えることができなかった。しかし，その時は何も浮かばなかったが，考えているうちに一つの出来事を思い出した。

中学生の頃，テストや部活動でとにかく結果に拘りすぎる私に，担任の先生がくれた「結果より経過」という言葉。その言葉は，教師となった今も，私の大切な言葉で，結果だけでなく経過での子どもの努力や姿を大切にしよう。そう心がけている。そして，この「結果より経過」という言葉は，これまで，自分の大切な言葉として子どもたちにも伝えてきた。

そんな中，２年前の６月。たまたま目にした中学校体育大会のプログラム。テーマに「結果より経過」の言葉が。後にそのテーマは，私の教え子が提案したと知った。そして後日，提案した子の母親に会った時，「娘の心にいつでもこの言葉があるそうですよ。」という有り難い言葉をいただいた。自分の大切な言葉を，教え子が大切な言葉にしてくれている。まさに「教師冥利に尽きる」。そんな出来事だった。

「教師冥利」は，子どもたちが感じさせてくれるもの。それ以上に，私が，一つの言葉でも姿でも，子どもたちに何かを感じてもらえる教師を目指したい。これからも「結果より経過」の言葉を胸に。

私と教育 「言葉の重み」

遠別町立遠別中学校　教諭　**坂　田　一　幸**

私は期限付教諭を含め，今年度で12年目が終わろうとしている。初任校での経験は，今でも私の礎になっているのはもちろんのこと，当時先輩から言われた言葉が心に深く刻まれている。

「先生の言葉は軽い」

当時，このアドバイスの真意を捉えることができなかったが，今では少しずつこの言葉の意味を，自分なりに理解できるようになってきたと感じる。当時の私は「目の前の問題にだけ」対応していたように思う。中・長期的な視点で物事を捉えることができず，ただ目の前の問題に向かっていただけであった。しかし，「指導の先にある成長した姿」をイメージするようになり，自分の思考に変化が見られるようになった。目の前の問題等に立ち向かうのも大切であるが，中・長期的な視野に立って，責任をもって子どもを保護者から預かるという視点を大切にしていくようになっていた。個人の感覚も大切ではあるが，話の“根拠”を明確にして，物事を客観的に捉えることの難しさを現在，痛感している。

ここ数年で変化した考え方が正しいのかどうか，私自身計りかねない。今後も自分や生徒と向き合いながら，自問自答し，努力していきたい。

表紙写真解説　「最後はオール北光中で」　留萌市立北光中学校

開校56年を数える留萌市立北光中学校は，平成30年３月31日をもって閉校となります。今年度の生徒数は７名となり，昨年度の半数に減ってしまいました。行事については，少人数ゆえの難しさから，内容の見直しも検討されましたが，生徒から「最後の行事」だからこそ，例年通り行いたいとの強い要望がありました。

生徒は，少人数の弱みを強みに変えるための話し合いを何度も行い，その結果，先生方とも協力して「オール北光中」で取り組むことになりました。

体育大会での「北光ソーラン」では，踊りが想像以上にハードで，体力で勝る生徒が先生方に指導するなどのハプニングも見られましたが，本番でのダイナミックな踊りの披露へと繋げることができました。また，学校祭での「合唱」も美しいハーモニーを奏でるという共通の目標のために，教員と生徒という立場を越えて，楽譜読みや音とりなどを一緒に練習し，聞いている方々が感動する合唱をつくりあげることができました。

いずれの行事も生徒一人一人の思いと教職員の願いが重なり合うことが相乗効果となり，素晴らしい取組となりました。見ていただいた方から，生徒だけではなく，先生方の頑張りに対してもお誉めの言葉をいただけたことは大きな励みとなりました。

■ 平成29年度 今年度を振り返って〈各部より〉 ■

研究部

第８次共同研究３年次計画の最終年度であった今年は，「単元を見通した掲示の仕方」「記述による振り返り方」「目的意識や相手意識を明確にした指導の仕方」に重点をおき，研究協力員の先生方に国語と算数の２本の検証授業を実施していただきました。授業の様子や成果と課題を研究紀要第23号にまとめました。個人の日々の実践や校内研究に活用していただき，研究内容に対する率直なご意見を伺うことができれば幸いです。

研修部

今年度も５回の研修講座を開催しました。お忙しい中講師を引き受けてくださった吉弘先生・小沼先生・大内先生，参加してくださった先生方，参加する先生方を快く送り出してくださった校長先生始め諸先生方のお陰で，無事に運営することができました。少しでも皆様のお役に立つことができていましたら幸いです。本当にありがとうございました。

平成30年度は，８月１日(水)・９日(木)のミニ道研など５回の研修講座を計画しております。ミニ道研は「外国語活動」「プログラミング教育」「情報モラル」「カリキュラム・マネジメント」「主体的・対話的で深い学び」です。時期が近くなりましたらご案内いたしますので，多数のご参加をお待ちしています。これからもよろしくお願いいたします。

広報部

北海道教育庁留萌教育局，管内の学校や諸先生方，関係機関の多大なるご理解とご協力により，無事所報を４回発行することができたことに心より感謝申し上げます。

今年度は，第８次共同研究３年目を迎え，最終年度の成果とまとめに向けた検証授業を中心にお伝えしてまいりました。皆様の日々の研修に役立てていただければ幸いです。

また，これまで管内各学校にご協力いただき，研究紀要を収集し，研究図書同様に研究資料として貸出を行ってきました。研究の取組の交流を図るためにも今年度もまた，完成したものを一部研究所に寄贈願います。

今後も管内の教職員の皆様に「読まれる・生かせる」所報の作成に向けて努力して参ります。１年間のご愛読，ありがとうございました。

編集後記

今年度は共同研究３年次計画の３年目として，研究所の研究の総まとめの年でした。10月には福原研究協力員の国語の授業，11月には佐藤研究協力員の算数の授業が実践されました。

授業後には，参加された先生方の貴重なご意見をいただき，多くの成果・課題を得ることができました。紀要にまとめておりますので，ご覧いただけたらと思います。

今年度最後の所報には今年度をもって定年退職を迎えられるお二人の先生に，長年の教員生活を振り返っていただき，原稿を寄せていただきました。また中堅として活躍しておられるお二人の先生にも，日々の教育実践を紹介していただきました。

今年度も管内の先生方を始め、たくさんの方々のご理解，ご協力をいただき、研究所業務を推進することができました。ありがとうございました。来年度もよろしくお願いいたします。

留萌管内教育研究所
所報『留萌』第92号
平成30年３月15日発行

編集▶留萌管内教育研究所 広報部
メールアドレス▶ruken@educet.plala.or.jp
ホームページ▶http://ruken.hs.plala.or.jp

表紙題字▶所長　石田正樹
TEL・FAX▶0164−42−2635
印刷所▶白鷗印刷株式会社